開催地名：滋賀県彦根市	
開催日時	令和 3 年 9 月 15 日（木）　10:50～12:40
開催場所	彦根市立西中学校
語り部	糸日谷美奈子　　（千葉県千葉市）
参加者	中学一年生　約 118 名
開催経緯	当市では、南海トラフ巨大地震による最大震度 6 強の被害が想定されている。 当学区は、歴史的背景から彦根城築城の際につけかえられた河川や琵琶湖によってつくられた低地が多く、河川氾濫や地盤の脆弱性等の心配がある。また、旧城下町の名残として木造密集住宅、狭あい道路が多く延焼危険度が高い上、住宅地の道幅が狭い場所も多く、災害時には救急車両が通れない事態が想定され災害への対策が必要と考えられる。 本校では、地震に対する避難訓練や水害に対する避難訓練や、防災学習計画を立案し、訓練や学習を行っているが、災害に対応できる街づくりを防災の観点から生徒にもう一度じっくりと考えさせたい。
内容	（1）釜石市という土地と、釜石東中学校での取り組み 東北地方の太平洋側に位置する岩手県のなかで沿岸南部にある釜石市では、明治三陸地震津波(1896 年)、昭和三陸地震津波(1933 年)という 2 度の津波被害を受けた歴史がある。また、政府から 30 年以内に震度 6 弱以上の地震が起こる確率が 75%以上であると発表されていた。そのため 2009 年から防災教育を強化。釜石東中学校では、防災マップ作成、救急搬送や応急処置、水上救助、炊き出し等の学習、安否札 1000 枚の配布を実施した。 （2）東日本大震災の発災時について 平成 23 年 3 月 11 日 14 時 45 分ごろ、震度 6 弱の地震が発生した。地鳴りが聞こえ、職員玄関から駐車場に出たが、その間にも揺れが大きくなり、渡り廊下が大きくたわんでいた。高台に避難所とする介護施設があり、走って逃げた。この時、釜石東中学校に在籍していた生徒は全員が無事に避難していた。これまでの歴史と、災害の危険性を日頃から教育していたこと、避難所の想定をしていたことが実を結んだのだろう。 しかし、最終目的地となる施設に到着し海を見ると、大きな音と共に砂煙が迫ってくる光景が見えた。災害時、この施設まで逃げることまでは想定していたが、その先は未知でパニックに陥った。「逃げろ！死ぬぞ！」と叫ぶ声が聞こえて我に返り、今度は山へと走り出した。

	（3）東日本大震災、その後の避難所生活から学んだこと 　このような経験を通して、私は“過去の出来事から災害について学ぶこと”が重要だと感じた。きちんと頭に残っていれば、楽しく学んでもかまわない。また、知識を共有することで、地域を動かすことにも繋がる。災害時、怖いから逃げようと声を挙げることも周囲を巻き込む手段になる。実際、震災当日「小学生たちが逃げている姿を見て自分も逃げようと思った」と話す地域住民もいた。 　被災者の心理状況には段階がある。避難所についてすぐの感情や感覚が鈍る時期は、疲れているはずだが、お腹が減ることはなかった。被災者同士の連帯感が高まる時期には、生徒たちが率先して避難所運営を行う姿が目に入った。交代でトイレ掃除を行いつつ、ラジオや掲示板で避難情報や炊き出しの場所などを伝え、別の避難所同士でも連携を取るようになった。まわりとの格差が見える時期には冷たい言葉を投げる人もいたが、前を向ける時期になると復興支援に来てくれた方を励ます看板を作るといった行動が増えた。
開催地より	これまで災害や津波について他人事のように感じていたが、お話を聞く中で大勢の方が亡くなられたこと、災害が恐ろしいものであることを実感した。また災害は発生直後だけではなく、避難所に避難した後や家に戻ってからも、電機やガス、水道などのライフラインに問題が起こることで生活を困難にすること、そしてその大変さを感じることができたと思う。 　今回の講演で学んだことを忘れずに、今後は自分自身の問題として災害や避難した後のことについて考えていきたい。